

# 興福寺

第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅶ

2016

興福寺





西室北辺調査区（Ⅱ区）全景（西から） 奥に大房北端の礎石、手前に中近世遺構群がみえる



北円堂院北面回廊調査区（Ⅲ区）全景（南西から）手前に北面回廊の基壇外装が残る



北円堂院内庭部調査区（Ⅳ区）全景（北から）調査区中央の玉石が入る小穴が燈籠基礎据付穴

# 序

興福寺は和銅3年（710）の草創で、去る平成22年（2010）、創建1300年を迎えた。当山では、この年の前後各10年つまり20年間を「興福寺創建1300年記念事業期間」と位置づけ、「天平の文化空間の再構成」を合言葉に、いわゆる第1期境内整備事業を鋭意進行中である。

本事業の最重要課題は、享保2年（1717）に焼失した中金堂の再建で、現在、平成30年（2018）秋の落慶を目前に、最終工程に入っている。

こうした中金堂の再建後ひきつづき、北円堂院の南門とそれに取り付く回廊を可能な限り復原する予定で、これらが整えば、興福寺の境内も、かつての雑然とした寺觀をそうとう修正できるのではないかと考えている。

もとより、当山の境内整備は、この他にも行なうべき項目が多い。中金堂と北円堂に近い僧房や經蔵・鐘楼なども、その基壇表示が望まれるが、本書は、そのなか、西室および北円堂院（承前）の発掘調査の概報である。調査に当たられた奈良文化財研究所の各位に、謝意を表する次第である。

平成28年3月

興福寺貫首 多川俊映

## 目 次

### 序

### 目 次

1 調査経過	3	5 結 語	31
2 西室と北円堂院の歴史	4	(1) 西室の調査成果	31
(1) 西室の歴史と既往の調査	4	(2) 北円堂院の調査成果	33
(2) 北円堂院の歴史と既往の調査	6	報告書抄録	34
3 遺 構	7		
(1) 調査前の地形および基盤層と整地	7		
(2) 西室とその周辺の遺構	7		
(3) 北円堂院の遺構	18		
4 出土遺物	21		
(1) 土器・陶磁器	21		
(2) 瓦磚類・土管	25		
(3) 金銀製品・錢貨	28		
(4) 冶金関連遺物	29		
(5) 石製品	29		
(6) 動物遺存体	30		

### 例 言

1. 本書は興福寺第1期境内整備事業にともなう2013・2014年度発掘調査概要報告書である。
2. 調査は興福寺の委託を受けた独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部（平城地区）が、2013年6月3日から10月9日まで、および2014年9月29日から2015年1月16日まで実施した。
3. 調査は、小池伸彦・渡辺見宏・箱崎和久・神野恵・石田由紀子・番光・芝康次郎・山本祥隆・川畠純・前川歩・松下迪生が担当し、加藤瑛（奈良大学卒業生）、江上輝・間所克仁・宮本博喜（奈良大学）、大久保芳紀（奈良大学大学院）、石崎健斗（東京大学大学院）、高尾美由紀（横浜国立大学大学院）が参加した。
4. 調査にあたっては、文化庁・奈良県教育委員会・奈良市教育委員会の協力を得た。
5. 本調査は、都城発掘調査部（平城地区）の平城第516次調査および第540次調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準にしたがい一連の番号を付した。発掘遺構図の座標値は、世界測地系（平面直角座標系第Ⅷ系）による。
6. 本書の作成は、当調査部副部長・渡辺見宏の指導のもと調査員全員があたり、全体の討議を経ておこなった。編集は、芝康次郎が担当し、各項は調査担当者が執筆を分担した。なお、4（6）は当研究所理蔵文化財センター研究員の山崎健が執筆した。執筆者名は執筆箇所の末尾に示す。
7. 遺構・遺物の写真是、中村一郎・栗山雅夫・杉本和樹・鎌倉綾が撮影した。
8. 2013・2014年度発掘調査の概要是、すでに「奈良文化財研究所紀要2014」および「奈良文化財研究所紀要2015」にて報告している。本書は両報告を改めて検討した成果を示しており、これが現段階での正式な見解である。

## 1 調査経過

今回の調査は、興福寺西室と北円堂院を対象とした。

興福寺では「興福寺境内整備基本構想」(1998年)に基づき、寺觀の復元・整備を進めている。この整備事業にともない、奈良文化財研究所(以下、奈文研)では、1998年以來、中金堂院、南大門、北円堂院等の発掘調査を継続しておこなっている。この事業の一環として、2013・2014年度には西室(西僧房)および北円堂院において2度の調査を実施した。本報告は、これらの概要報告である。

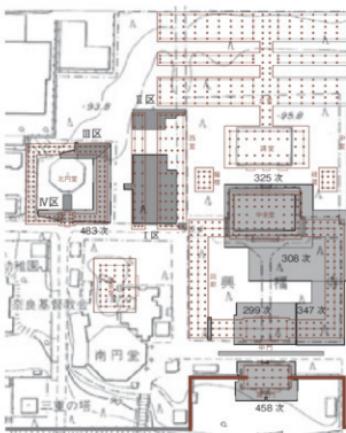
発掘調査以前の西室跡には、大房のものと推定される建物の礎石が一部露出していた。2013年度調査では、西室の南半部を対象とした。調査の過程で、北円堂院との間の遺構の様相を確認するために西に拡張区を、西室基壇の東南隅の様相を確認するため東に拡張区を設けた。調査面積は計985 m<sup>2</sup>である。調査は2013年6月3日に開始し10月9日に終了した。本書ではこの調査区をI区とする。調査では、西室大房の建物や基壇の規模にかかる情報を得たほか、大房の西に隣接する掘立柱建物の存在が明らかとなった。

2014年度の調査は、調査区を3つに分けて実施した(第1図)。本書では、これらをII、III、IV区とする。II区は西室北辺部、III区は北円堂院北面回廊の一部、そしてIV区は北円堂院南面内庭部である。II区では、2013年度調査をふまえて、西室の桁行規模の確定を目的とした。北円堂院では、2011年度調査(平城第483次)の補足調査をおこなった。III区は北面回廊未調査部分の様相把握、IV区は北円堂前面の燈籠や参道の痕跡の有無の確認を調査目的とした。調査面積は、II区が269 m<sup>2</sup>、III区が138 m<sup>2</sup>、IV区が44 m<sup>2</sup>である。調査は2014年9月29日に開始し2015年1月16日に終了した。II区の調査では、西室大房の桁行(南北)の基壇規模が確定し、I区で検出した掘立柱建物の北端も確認した。III区では、2011年度の調査成果を追認し、IV区では、内庭部での燈籠の存在が明らかとなった。

(芝原次郎)

第1表 調査経過

2013年
6月3日 I区、東機掘削開始。(~6月24日)
6月22日 I区、遺構検出開始。
8月1日 I区、西征張代兼機掘削。
8月23日 I区、ハイライダーによる全景写真・地上写真撮影
8月28日 I区、クレーン垂直写真撮影。実測作業開始。
9月1日 I区、実測調査開始。
9月11日 現地見学会。
9月20日 記者発表会。
9月28日 現地見学会(855人の参加をみる)
10月8日 現地見学会。
10月9日 I区、砂撒き。撤収。
2014年
9月29日 II区、東機掘削開始。(~9月30日)
10月1日 III区、東機掘削開始。(~10月7日)
10月2日 II区、北面回廊地盤石再検査。
10月14日 III区、近世・古代土坑群の掘り下げ。
10月21日 III区、全景写真および細部写真的撮影。
10月22日 III区、実測作業開始。
10月28日 II区、人力掘削開始。
10月30日 III区、西南隅の基礎部分で地山を確認。
11月5日 II区、中近世遺構群の掘削を開始。
11月11日 II区、全景写真および細部写真的撮影。
III区、廻削部分写真撮影。
11月12日 II区、実測作業。(~11月13日)
11月17日 IV区、東機掘削。
11月20日 IV区、方形土坑SC1003の剥下下に土器敷を確認。
11月21日 IV区、全景写真および細部写真撮影。
12月2日 IV区、全般土器敷。
12月4日 II区、東方に拡張区設ける。
12月18日 II区、ハイライダーによる全景写真・地上写真撮影。
12月19日 III・IV区、実測作業終了。
2015年
1月16日 II区、図面作業全て終了。砂撒き。撤収。



第1図 発掘調査団位置図 1:2500

## 2 西室と北円堂院の歴史

### (1) 西室の歴史と既往の調査

寺院の存立のために、所属する僧侶の存在は不可欠な構成要素である。したがって、僧侶たちが居住し日常生活を送る僧房も、寺院にとって欠かせない施設と位置づけられよう。僧房は一般に、桁行の長い建物の内部を細かく仕切り、多くの小部屋を設ける構造を特徴とする。

興福寺では、中金堂および講堂の西・北・東各面をコの字型に取り囲むように僧房を配置していた。このような形態を三面僧房と称し、特に興福寺ではそれぞれを西室・北室・中室と呼び習わしている。このうち、西室と中室は梁行が大きな大房の外側に梁行の小さな小子房が柱筋を揃えて並立する構造で、北室は南から上階僧房・小子房・下階僧房の3棟が並列していたとされる。なお、東面の僧房については、創建当初は東僧房などと称されていたものの、平安時代に食堂の東側に新たに新築 (=東室) が建立されて以降、中室と呼ばれるようになったとされる(初見は平城京跡出土のいわゆる告知札〔「平城宮発掘調査出土本簡概報」7、8頁〕)。

**創建** 西室(および中室)について、「興福寺流記」(以下、「流記」)は

東西僧房二間(各高一丈六尺六寸、廣四丈五尺)。寶字記云、二丈。長十一間、々別一丈九尺。寶字記云、廿丈二尺)

小子房二間(各高一丈二尺、廣一丈五尺、長同大房)。寶字記同之)

と記している。これは天平年間に成立した興福寺の資財帳のひとつと考えられる「天平十六年記」を引用した記述であり、大房・小子房とも、天平年間に以前に完成していたことは確実といえる。

一方、「流記」の別の箇所では「三面僧房」について「本願之御時所造立也」と記しており、これに信を置けば、西室の創建は「本願」=藤原不比等が死去した養老4年(720)8月以前に遡ることとなる。現実問題としても、興福寺などの大寺院が僧房がない状態で長く機能していたとは考えにくい。西室(を含む三面僧房)は、興福寺の創建からそれほど時を経ずして完成したとみて大過ないであろう。

**焼失と再建** 1300年における歴史のなかで、興福寺は失火・放火や落雷、兵乱などによる火災に見舞われること屢々であった。わけでも西室は、都合8度も焼失の憂き目に遭い、またその度に再建さ

第2表 興福寺西室略年表

和暦	西室	内容	出火原因	典拠史料
720年後	創建			【興福寺流記】
元慶2	878	焼失①	失火	【日本三代光緑】
元慶5	881	再建		【日本三代光緑】
永承1	1046	焼失②	西里民家への放火から延焼	【高興福寺記】 【扶桑略記】ほか
永承3	1048	再建		【高興福寺記】 【扶桑略記】ほか
康平3	1069	焼失③	中金堂からの失火	【康平記】 【扶桑略記】 【三舍定一記】
治暦3	1067	再建		【興福寺流記】
永承1	1096	焼失④	北室(上階僧房)からの失火	【中右記】 【後二条師通記】ほか
嘉承2	1107	上棟		【中右記】
治承4	1180	焼失⑤	平重衡の南部討伐	【玉葉】
1200年後	再建			【春日大社文書】16
建治3	1277	焼失⑥	他の僧房への落雷からの火災	【興福寺略年代記】ほか
弘安7	1284	再建		【三会定一記】
嘉慶2	1327	焼失⑦	寺内争議に基づく放火から延焼	【大乗院日記】ほか
嘉吉2年頃	1442頃	再建		【大乗院日記】
享保2	1717	焼失⑧	講堂からの失火	【南都年代記】

参考文献

- 太田寅太郎「唐招提寺の創建と其の背景」、昭和書院、1979  
藤谷千秋「奈良時代における興福寺の進歩と其の背景」、「京都仏教」64、1990  
藤谷千秋著「平安時代における興福寺の進歩と其の背景」、「仏教芸術」194、1991  
藤谷千秋著「鎌倉時代における興福寺の進歩と其の背景」、「仏教芸術」257、2000  
藤谷千秋著「南北朝・室町時代における興福寺の進歩と其の背景」、「立命館大学古今学術叢書」8、2008  
藤谷千秋著「安土桃山・江戸時代における興福寺の進歩と其の背景」、「立命館大学古今学術研究所研究報告」6、2005

れてきた(第2表)。このうち、永承元年(1046)の火災(2度目)や治承4年(1180)のいわゆる平重衡の南都焼討による焼亡(5度目)、また享保2年(1717)の火災(8度目)などは、興福寺伽藍のほぼ全城におよぶ大規模な罹災である。一方、元慶2年(878)の火災(1度目)など、西室ないし近隣の堂宇のみが害を被ったと目される、やや

小規模なケースもある。

8度もの焼亡を経験した理由のひとつに、伽藍内での西室の立地が挙げられよう（第1図）。東面を中金堂院および講堂、南面を西金堂、西面を北円堂院、北面を北室に囲まれる西室は、他の堂舎からの延焼を受けることも多かった。また、興福寺伽藍の東限が平城京の京極たる東七坊大路にあたるのに対し西側には街区が展開していたこと、さらに西室自体が僧侶たちの居住空間として火気と無縁ではなかったことなども、罹災回数増加の一因として指摘できるかもしれない。

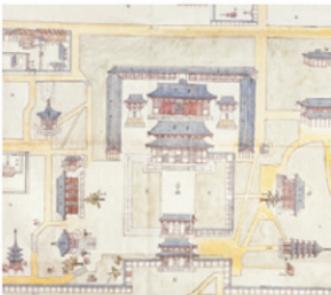
**廃 總** 西室が最終的に焼亡・廃絶したのは、享保2年（1717）の火災においてである。

ただし、小子房のみはこれ以前に、大房に先立ち廃絶していたらしい。ここでは特に、宝永5年（1708）作製の「興福寺伽藍春日社境内絵図」（第2図）に注目したい。本図では、前年（宝永4年、1707）10月の地震で中金堂院の西面回廊が転倒したことを受け、当該箇所については建物を描かず、基壇線を示すかのごとく墨線のみが引かれている。作製時の現況をありのままに描写する姿勢がみられる本圖の内容に、一定の写実性や正確性を認めることは許されよう。そして、本圖の西室部分には大房のみが描かれ、小子房の姿は認められない。詳しい時期等は不明とせざるを得ないが、少なくとも本圖が描かれた宝永5年（1708）の時点で、小子房はすでに廃絶していたと見なすのが妥当であろう。

**既往の調査** 西室は、享保の火災のちは再建されず、現在は地表に露出する礎石などからわずかに往時の姿が偲ばれるのみである。

一方、西室の建物規模の復元に関わる調査・研究も存する。ここでは、大岡實による案（『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966）と鈴木嘉吉による案（『奈良時代僧房の研究』奈文研、1957）を紹介したい。大房の梁行方向については両案とも4間、総長45尺とし、またこれは『流記』所引「天平十六年記」の記述と合致する。対して、桁行方向に関しては両者が見解を異にする。大岡案は桁行9間の225尺等間（総長2025尺）とし、北室との規則性を重視した案となっているのに対し、鈴木案は桁行11間のうち北6間を225尺、南5間を15尺（総長210尺）と復元する。なお、前者は『流記』所引「寶字記」の記す寸数（「廿丈二尺」）に、後者は同「天平十六年記」の示す寸（「長十一間、キ別一丈九尺」、 $11 \times 19 = 209$  尺）に近似する。

西室を含む僧房にかかる発掘調査も幾度かおこなわれている。昭和30年（1955）のガス管埋設工事にともなう調査では、西室大房の東・南・北各面で基壇外装（凝灰岩製の地覆石および羽目石）が確認された（『奈良時代僧房の研究』〔前掲〕）。また、翌年に実施された食堂の発掘調査に際しても、中室小子房の東・南両面で基壇外装（凝灰岩製の地覆石・羽目石および葛石）を確認し、その外周に石敷きを検出している（『興福寺食堂発掘調査報告』奈文研、1959）。ただし、これらはトレンチによる部分的な調査であり、本格的な発掘調査は今回が初めてとなる。



第2図 興福寺伽藍春日社境内絵図（部分、興福寺蔵）

## (2) 北円堂院の歴史と既往の調査

北円堂院は、八角円堂の北円堂とそれを取り囲む半廊の回廊からなる。北円堂院の歴史や回廊部分を中心とする発掘調査成果などについては、本概報シリーズのVI(以下、「概報VI」)で報告されている。そのため、ここではその概略を述べるとともに、同書刊行後におこなわれた発掘調査を紹介する。

**創建**　『流記』によれば、北円堂院は藤原不比等の供養のために元明太上天皇・元正天皇が長屋王に命じて造営を開始し、一周忌にあるる養老5年(721)8月3日に完成したとされる。また、堂内には弥勒仏像以下9体の尊像が安置され、堂のまわりを「廊廻」(=回廊)がめぐり、それに「南門」が付設されていたことなども記されている。なお、前年10月に設置された「造興福寺仏殿司」(『続日本紀』)については、この北円堂院の造営を担う官司と解するのが通説である。

**焼失と再建**　承元年(1046)12月、興福寺は伽藍の大部分を焼失するほどの大規模な火災に見舞われたものの、この際は幸運にも北円堂院には火の手が及ばなかった。だが、同4年2月、北円堂院は唐院・伝法院とともに焼亡の憂き目を見ることとなる(『扶桑略記』)。その後の再建は約半世紀後、寛治6年(1092)まで遅れた。しかしながら、同年正月19日の再建供養には閑白藤原師実以下多くの公卿が参会し、盛大に執りおこなわれたという(『扶桑略記』『中右記』『為房卿記』など)。また、この時の記録からは、北円堂本体のみでなく回廊も再建されたことが確認できる。

治承4年(1180)12月、平重衡の南都焼討で興福寺は灰燼に帰し、北円堂院も2度目の焼失を迎えた。翌泰和元年(1181)6月には造興福寺行方事官の任命がおこなわれるなど復興体制は迅速に整えられてゆくが、北円堂院の再建は一連の復興事業の末期に位置づけられ、完成は承元4年(1210)頃と目される(承元4年具注釋裏書など)。一方、その後は北円堂は大きな災禍に遭うこともなく、この鎌倉時代初期の堂舎が現在に伝えられ、興福寺では最も古い建造物のひとつとなっている。ただし、この時は回廊の完成を示す明証が諸史料に認められず、後述の2011年度調査では、回廊については再建は成らなかっただとみるべきとの見解が提示されている(詳細は「概報VI」参照)。

**既往の調査**　北円堂院については、戦後を中心に、発掘調査も幾度かおこなわれている。まず1962～1965年の北円堂解体修理にともない北円堂基壇の地下部分が調査され(奈良県文化財保存事務所編『重要文化財興福寺大湯屋・国宝同北円堂修理工事報告書』1965)、つづいて1975・1977年には防災施設工事にともない回廊部分が調査された(興福寺編『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1978)。とりわけ後者の調査では回廊基壇や礎石・基壇外装(凝灰岩製の地覆石・羽目石)等が確認されており、今回検出した北面回廊の基壇外装もこれを再確認したものである。

さらに、2011年には、第1期境内整備事業にともなう発掘調査の一環として、南面・東面回廊および北面回廊の一部が本格的に調査された(『概報VI』)。これにより回廊各面の柱間配置の復元案が示され、今回の調査対象である北面回廊については、北門にともなう中央間(13尺)および東西両隅間(それぞれ11尺)以外の計12間は約9.6尺等間で割り付けられたとの見解が提示されている。

加えて、近年の境内防災設備工事にともない、2014年度に北円堂院内底部の一部が調査された(芝原次郎ほか「興福寺境内の調査—第540次・541次・第2013-32次」「奈良文化財研究所紀要2015」、2015)。それによると、北円堂以東では標高948m程度山面を確認したのに対し、以西では標高935mほどまで掘り下げても造成土が厚く堆積し、地山は確認されなかつたという。これは、次頁で言及する北円堂院周辺の基盤層や造成の様相についての知見を補強するデータといえる。

(山本祥隆)

### 3 遺構

#### (1) 調査前の地形および基盤層と整地

調査前の地形　調査地には、カシやマツなど多数の樹木が見られたが、調査にともない伐採した。また、地表面には西室大房の礎石の一部が露出していた。この付近の地形は、礎石露出部分ではおおむね平坦で、そこから北西方向に向かってやや標高を下げる。設定した調査区（I・II区）の東端は、興福寺境内の参道に面し、西室大房の東側柱筋想定位置は参道の路面にある。

基盤層と整地　調査区の基本層序は、上から表土、暗褐色ないし褐色砂質土（土師器片を多く含む）、そして、基盤層の明黄褐色粘土あるいは黄褐色砂礫土である。基盤層にはチャート等の円錐ないし亜円錐を多く含む。基盤層の標高は、I・II区とともに東方に露出する西室大房の礎石付近では95.2～95.3mと平坦で、西室大房の西側柱筋の西2～3mに展開する数条の南北溝（土管路渠）群を境に、西方に向かって緩やかに標高を下げ、調査区西方の標高は約94.7mとなる。北円堂院東面回廊付近の基盤層の標高は約94.7mであり（2011年度調査所見）、今回のI・II区西端から西は一度平坦になることがわかる。そして北円堂院北面回廊の東部付近（Y=-15.574）を境に標高約93.2mまで大きく落ち込む。南面回廊の南門想定位置以西でも同様の落ち込みが認められ、さらに北円堂の西方でおこなった2014年度の防災設備工事では、標高93.5mでも基盤層は確認できていない。したがって、この基盤層は、北円堂院の中央付近を境に西方に向かって急激に落ち込んでいたと考えられる（第3図）。

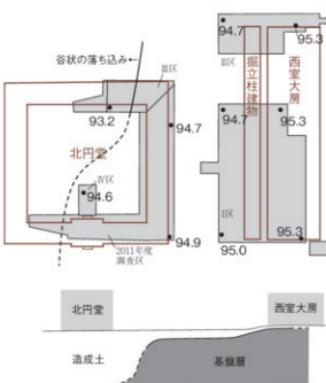
西室から北円堂院の中央付近までの遺構検出面は、基本的に基盤層上面である。ただし、西室大房の西方では、基盤層の上に暗褐色ないし褐色砂質土が認められ、この上面で複数の遺構を検出した。これらの遺構の埋土には中世の土師器片を含むことから、それ以後の整地と考えられる。また、基盤層が大きく落ち込む北円堂院の西方では、基盤層の上に、造成土である暗褐色粘土を複数層重ねたのちに、黄褐色粘土と砂質土を互層とした版築土を積む。

#### (2) 西室とその周辺の遺構

##### i. 西室に関わる遺構

西室大房SB10450　桁行10間、梁行4間の南北棟礎石建物で、北端の桁行1間半分と、南方の桁行7間分を検出した（第6図）。建物規模は、南北約62.5m（212尺）、東西約12.4m（42尺）で、柱間寸法は、桁行が南端2間分のみ約48m（16尺）、そのほかは約6.6m（22.5尺）、梁行は中央2間が約32m（11尺）、両脇間は約3.0m（10尺）である（基準尺はこれまでの調査成果に倣い1尺=0.295mとする）。桁行方向の親柱礎石間には間柱礎石を2基ずつ配し、それぞれの柱間は約2.2m（7.5尺）である。

親柱礎石は三笠山産安山岩や花崗岩の自然石である。安山岩の礎石は、長軸90～115cm、短



第3図 基盤層の標高と断面模式図

軸70～85cm、成60～70cm程度で、柱座などの造り出しはない。上面が赤変しているものもあり、被熱痕跡と考えられる。礎石据付穴は径1.3～1.5m程度の開丸方形ないし梢円形で、深さは検出面から30cm程度である（第4図）。東入側柱筋（口列）の礎石は、現参道の造成により後世に若干西方へ動かされているが、そのほかの残存している安山岩の礎石には据え替えの痕跡はなく、遺物の出土もないことから、創建当初の位置を保っていると考えられる。花崗岩の1石（ハ十一）は、礎石の下方に古い礎石の抜取穴と据付穴が認められる。後世の据え替えと考えられるが、抜取穴、据付穴の埋土から遺物は出土せず、据え替えた時期は不明である。この礎石の大きさは、長軸80cm、短軸65cm、成20cmで安山岩の礎石よりも薄く、やや小さい。礎石が失われている箇所では、据付穴、抜取穴を検出した。「ハ一」、「ホ二」の礎石抜取穴には多量の瓦や拳大の礫などを含み（第5図）、「イ十一」の抜取穴には凝灰岩の切石が捨てこまれていた。また、「ニ七」礎石は、抜き取られてはいないものの、礎石下に瓦が差し込まれており、礎石を浮かせて抜き取ろうとした痕跡の可能性もある。

間柱の礎石は一部が残存していたが、失われているものも多く、抜取穴や据付穴のみを検出したものもある。これは礎石が小型であることや据付穴が浅いことに起因している。残存礎石の大きさは径50～60cm程度、成25cm。礎石据付穴は径70cm、深さは検出面から10cm程度。間柱の据付穴からも遺物の出土はない。断削調査をおこなった「ニ五」北側の礎石、「ホ十」北側の礎石は、創建時の位置を保っている。「ニ七」北側の礎石は石を2段に積んでおり、高さ調整の痕跡と考えられる。

**基壇** 西室大房SB10450の基壇は、砂礫を含む明黄褐色粘土からなる地山削り出しで造られている。基壇南方では上面にわずかに積み土が認められる。基壇外装は、北面と東南隅でのみ確認し、東南隅では雨落溝も検出した。いっぽう、基壇西面と東面の北端部では、基壇外装や雨落溝などの痕跡は、後世の造構による削平などにより確認できなかった。大房北妻と南妻の礎石心から地覆石外面までの距離は約1.9m（6.5尺）である。東面の基壇の出は、東南隅の羽目石と「イ一」礎石抜取穴の位置から、南北両面と同様に約1.9mと推定される。基壇北面および南面の地覆石の外面間距離は約6.65m（22.5尺）で、南北の基壇規模が確定した。東西の規模は現状では明らかにしえない。礎石上面の標高は約95.5m、基壇外装地覆石上端の標高が約95.0mであり、基壇上面と礎石上面との比高を約10cmと仮定すると、基壇高は約40cmに復元できる。

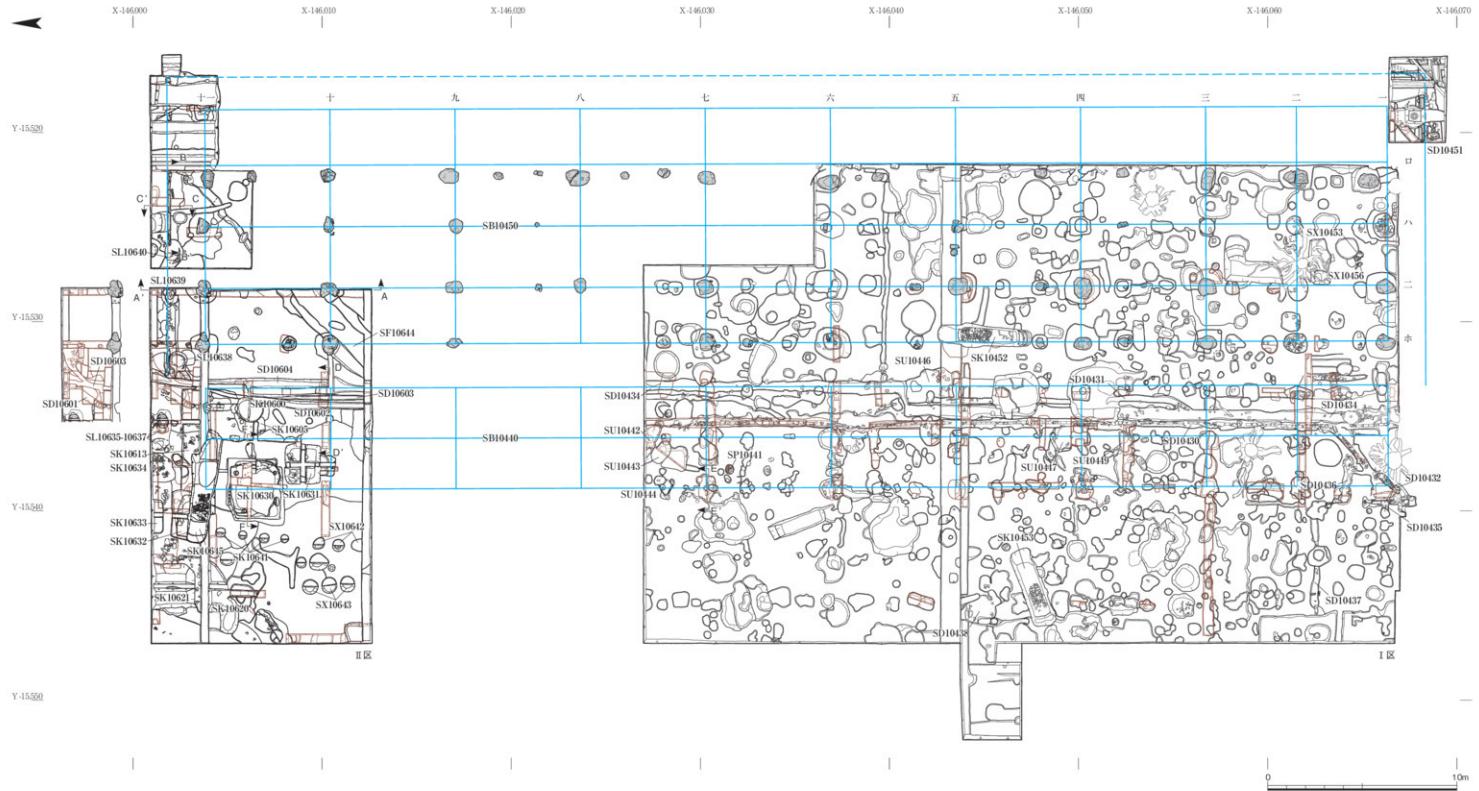
基壇外装は、北面・東南隅とも地覆石と羽目石を確認した。石材は、すべて二上山産凝灰岩である。基壇北面では、地覆石6石、羽目石5石を確認した。地覆石は幅20～25cm、高さ約15cm、長さは完存するもので93cm。羽目石は幅15～17cmで、高さは20cm、長さは完存するもので94～96cm。北面で



第4図 ニ五礎石据付穴断ち割り（南から）

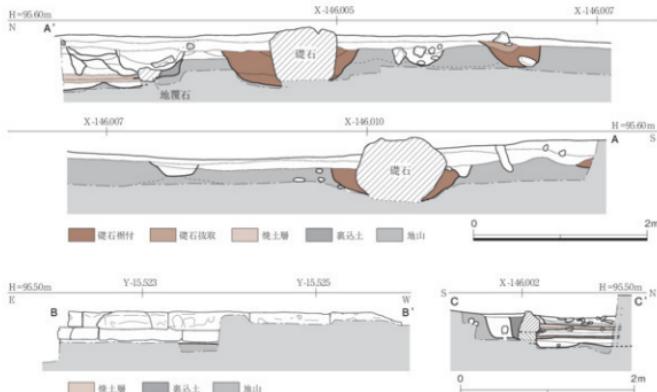


第5図 ハ一礎石抜取穴（南西から）

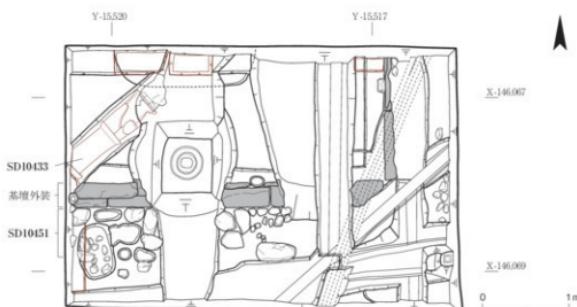


第6図 西室調査区（I・II区）遺構平面図 1:200（左端はII区北端の下層遺構を示す）





第7図 基壇北端土層図(A-A'・C-C')および北面基壇外装立面図(B-B') 1:50



第8図 基壇東南隅(東長張区)平面図 1:50



第9図 北面の基壇外装(北東から)



第10図 東南隅の基壇外装(南西から)

両者が見られたのは礎石ハ列より東方で、羽目石が地覆石よりも基壇の外に傾く（第7・9図）。いっぽう、礎石ハ列より西方では、地覆石のみが残存し、地覆石上面には羽目石をのせる仕口部分を残す。地覆石は、少なくともハ列より西では瓦片を含む整地土上面に据えられており、正確な時期は不明だが後世に据え替えた可能性が高い。ただし、地覆石の据え付け痕跡は1つのみであり（第7図）、その位置は当初の位置を踏襲していたと考えられる。基壇東南隅では、地覆石および羽目石の一部が残存していた（第8・10図）。南面は比較的残りが良いが、東面は後世の削平を受けて地覆石・羽目石とも外側を大きく削られていた。地覆石は計6石が残り、幅30～34cm、高さ10～15cm、長さは残存長で80cm。上面には、羽目石をのせる仕口をもち、露出部分は石組溝と同じ高さまで削られている。羽目石はすべて後世の造構により破損するが、幅17cm、高さ15cm、長さ69cmが残る。また、地覆石・羽目石の内側にこれらの据付掘方を検出した。据付掘方は幅52cm、深さは検出面から22cmである。

**石組溝SB10451** 基壇東南隅では地覆石に接して石組溝を検出した（第8・10図）。西室大房SB10450の雨落溝と考えられる。南面には溝外側の側石が1石のみ残存しており、地覆石から側石までの幅は、内法で40cm、深さ10cm。約20cmの扁平な安山岩砾を2列並べ底石とするが、一部抜き取られている。部分的に径10～15cmの縫を敍き詰めた部分がある。

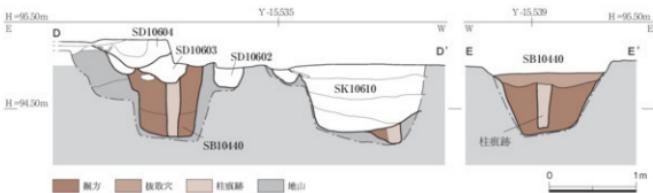
**掘立柱建物SB10440** 大房SB10450の西側柱筋の約25m西方付近には数条の南北溝渠があり、この溝渠土を除去して南北桿掘立柱建物の東側柱筋の柱穴を検出した（第6図）。桁行10間、梁行2間で、大房と梁行方向の柱筋を掘れる。建物規模は、桁行が大房と同じ約62.5m(212尺)、梁行は約5.2m(17尺)に復元できる。柱間寸法は、桁行は大房と同じく南端2間が約4.8m(16尺)、以北が約6.6m(22.5尺)であり、梁行はやや短く約2.6m(8.5尺)等間である。また、桁行方向の親柱間を三等分する位置（大房の間柱と柱筋を掘れる）に小型の柱掘方を検出した。

これらは、間柱または床束の痕跡と考えられる。

親柱の柱穴は、I区では樹根で確認が困難な棟通り南端の1基を除いてすべて確認し、II区では東側柱2基と棟通りの柱穴の2基（底面のみ）を確認した（第12図左）。その他の柱穴は後世の土坑群により削平を受け、確認できなかった。親柱の柱穴掘方は一辻0.8～1.2mで、深さは検出面から約0.8～1.0mである。親柱の柱穴には柱痕跡が残り、柱径は約20cmである（第11図）。いずれの掘方から



第11図 SB10440柱穴の断面(E-E'：南から)



第12図 SB10440柱穴断面剖面図（左:D-D'、右:E-E'） 1:50

も遺物は出土していない。一部の柱穴では、掘方の上位に抜取穴と考えられる厚さ20cm程度の埋土がみられた（第12図右）。これは掘立柱建物廃絶後に、新たに据え付けられた礎石の抜取穴である可能性も否定できない。間柱の柱穴掘方は大きさ、平面形状、深さともに不揃いだが、およそ1辺50～80cmで、深さは検出面から約40cmである。この建物の東側柱筋と、大房SB10450の西側柱筋との間の距離は、心心で約25mである。掘方埋土に遺物を含まないため創建時期は不明だが、掘方埋土が基盤層由来の標記じり黄褐色砂質土であるなど、SB10450の礎石据付穴の埋土と類似しており、創建は古代まで遡る可能性が高い。廃絶は、柱穴を壊す土坑SK10605が土器の年代観から、平安時代中頃が下限となる。この建物は、西室大房と南北規模が同規模で柱筋を揃えるため、小子房の可能性はあるが、大房との距離が約25mと近接しており、確定できない。この問題について第5章で改めて検討する。

このSB10440の基壇の積み土や地覆石等の基壇外装、雨落溝は、その痕跡を含めて確認できなかった。この建物周辺には後述する南北溝群や後世の土坑群があり、これらに削平されている可能性もある。

#### ii. 土管暗渠・素掘溝群

**土管暗渠SD10435～10438** SD10435～10437はI区西南部で検出した土管暗渠。SD10435は南北方向の暗渠で長さ約8m、SD10436・10437は東西方向の暗渠でそれぞれ長さ約4mと約6m分を検出した。SD10436は西端が、SD10437は東端がSD10435と接続する。削平により大半の土管が失われているが、幅40cm程度、深さ20cm程度の素掘溝に瓦質土管を据え、その上に平瓦をのせる。SD10435は凝灰岩を用いて補強されている。SD10435・10436は、後述のSD10432に壊されている。SD10438はI区西端で検出した東西方向の土管暗渠。長さ0.8m分が残存する。SD10435・10436・10438には行基式の丸瓦円筒土管が使用されており、一連の暗渠になる可能性がある。

**土管暗渠SD10430** I区中央を南北に縱断する土管暗渠（第13図）。長さ40m以上でI区調査区外の南北に延びる。I区南部では斜行する土管暗渠SD10432と接続する。幅40cm程度、深さ25cm程度の素掘溝に瓦質土管を設置し、その上に平瓦または丸瓦をのせて暗渠とする。土管の繋ぎ口の方向が異なる箇所があること、土管の繋ぎ口の形状が2種類あること、土管の傾斜の方向が場所により異なることなどから、これらは後世の改修部分と考えられる。この土管の下層から平瓦・丸瓦を並べた深さ20cmの溝が検出されたところもある。土管は、14～16世紀の玉縁式、ソケット式土管である。

**土管暗渠SD10431** SD10430の約1m東側で検出した南北方向の土管暗渠。SD10430同様、素掘溝に瓦質土管を設置する。幅40cm、深さ20cm、長さ17m。南北両端はゆるやかに西へ曲がり、SD10430に接続する。

**土管暗渠SD10432** I区南端で検出した北東～南西方向の暗渠。長さ約58m分を検出した。北端はSD10430と接続し、南端で東西方向に折れる。幅40cm、深さ25cmの素掘溝に瓦質土管を設置し、上に平瓦または丸瓦をのせる。SD10430との接続部分ではSD10430の土管の一部を壊して取り付け



第13図 土管暗渠SD10430・10432 検出状況（北から）

ている（第13図）。南端はSD10435を補強する凝灰岩ごと壊して設置されている。掘立柱建物SB10440の西南隅の柱穴を壊す。

**南北溝SD10434** I区中央を南北に縱断する素掘溝。幅70cm、深さ30cm程度で、長さ40m以上。I区の南側では土管暗渠SD10430のすぐ東に位置し、その据付掘方を壊す。I区中央付近で東に約2.4mクランクし、北へ延びる。

I区の土管暗渠群および素掘溝は、重複関係からSD10435～10438が最も古い。これらは土管の型式から平安時代以前に位置付けられる。後出するSD10430～10432は掘立柱建物SB10440の廃絶後、土管の型式から14世紀中頃に埋設され、16世紀にも改修されたと考えられる。SD10434はこれよりも新しく、近世に位置付けらる。

**南北溝SD10601～10604** II区西室大房において、大房SB10450の西方2～3mで南北溝を4条検出した。SD10601は瓦暗渠で、II区北端付近で東に斜行する。約3m分を検出した。それ以外は素掘溝である。幅約40～50cm、深さ20～40cmで、いずれも南流する。このうちSD10601が最も古く、次いでSD10602、SD10603と続き、SD10604が最も新しい。その年代は限定しにくいが、SD10601は、掘立柱建物SB10440より新しく、後述の円形土坑SK10600よりも古いことから、平安時代中頃～鎌倉時代に位置付けられる。またSD10602～10604は、SK10600よりも新しく後述の環群よりも古いことから、室町時代～江戸時代前半の間のいずれかの時期に収まると考えられる。これらの南北溝は、いずれも西室大房の西北隅付近で基壇に沿って折れないため、地覆石の抜取穴や据付穴とは考えにくい。SB10440廃絶後にSB1050の雨落溝や排水溝等として機能していた可能性がある。

### iii. 廃棄土坑群および土器溜

**小土坑SP10441** I区西北部で検出した小土坑。径50cm、深さ約35cm。内部からは丸瓦、径約15cmの樋とともに、平安時代初頭の須恵器杯、鉢、双耳壺が出土した。

**土器溜SU10442～10444** I区の北端で検出した3基の浅い土坑。いずれも大きさは長径1.4m程度、深さ20cm程度。埋土から多量の土器が出土しており、まとめて廃棄したものとみられる（第14図）。出土した土器の年代は、SU 10442・10443が13世紀中頃、SU10444が室町時代に属する。

**土器溜SU10446・10447** I区中央付近で検出した不整形な浅い土坑。SU10446は南北22m、東西1.6m。埋土から完形を含む土器が出土した。先述のSD10434より古く、SB10440の間柱柱穴より新しい。出土土器の年代は13世紀前半とみられる。SU10447は、東西1.2m、深さ10～20cm。この土坑の底面で



第14図 土器溜SU10442・10443・10444（南東から）



第15図 円形土坑SK10600 内の土器廃棄状況（北から）

SB10440 の柱穴を検出した。埋土には13世紀から室町時代の土器を含む。

**円形土坑SK10600** II区中央で検出した、径約12m、深さ約25mのほぼ正円形の土坑。埋土は大きく複数の単位に分けられ、検出面より50cm下から底面までの約2mの中に、数枚の砂層を挟んで、14世紀前半に位置付けられる赤土器を多量に含む（第15図）。土坑の底面には平瓦を数枚敷く。井戸の可能性もあるが湧水はなく、廐棄土坑として利用されたと考えられる。

**土坑群SK10605～10625** II区の南北溝群SD10601～10601よりも西方には、土器や瓦を多量に含む廐棄土坑群が展開する。大きいもので径10m以上、深さ15m以上、小さいもので径40cm前後と多様である。II区中央では土器の廐棄土坑が多く、西方では瓦の廐棄土坑が多い。また、SK10610とSK10622は調査区西南部の一帯に広がる土坑あるいは整地で、深さは両者とも1.5m以上ある（第6・12図）。土坑は複雑に重複し、平安時代から江戸時代にかけて掘削が断続的に繰り返されていたようである。II区西部のSK10619やSK10620では、奈良時代から平安時代の瓦や土器が出土した。また、II区中央部の廐棄土坑SK10605は、出土土器から平安時代中頃に位置づけられる。これらが最も古い土坑群である。後者は掘立柱建物SB10440の柱穴を壊しておらず、これより新しい。その他の土坑で年代が分かるものには、SK10613（17世紀前半）があり、この土坑からは、「びしゃもん」「文珠」「地蔵」などの墨書きを有する土器が出土した（23頁で後述）。

#### iv. 治金関連遺構

**SK10453** I区東南隅付近の西室大房基壇上で検出した（第16図）。2基が上下に重複しており、いずれも後世の礎石抜取穴により、北半が破壊されている。平面形は梢円形ないし不整な隅丸長方形を呈し、上部土坑は検出状態で、東西径約30cm、南北径約25cm、深さ15cm。下部土坑は大きく破壊を受けているが、上部と同規模とみられる。いずれも底部から側壁にかけて、被熱還元硬化面が認められた。埋土から鉄型片、銅津などの鋳鋼関係遺物と、褐色鉄津片、鍛造剥片、粒状津などの鐵鍛冶関連遺物が出土した。鉄津は被熱硬化粘土に密着した状態で出土しており、鐵鍛冶の可能性が高い。下部土坑からも同様の遺物が出土しており、同様の機能を有していたと考えられる（小池伸彦「興福寺西室出土冶金関連遺構・遺物の再検討」『奈文研紀要2015』、2015）。SK10453の土坑埋土からは中世の土器が出土したが、明確に近世以降の土器等は認められなかった。

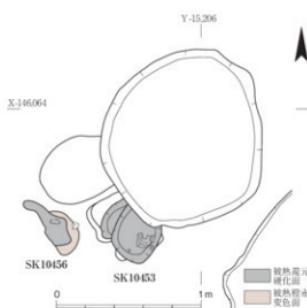
**SK10456** SK10453の西方約10cmの位置で、長径約40cmの不整梢円形を呈する被熱灰褐色還元硬化粘土面と、その東側外縁に同心円状に広がる幅約20cmの被熱橙赤変色面を検出した（第16図）。鐵炉の可能性もあるが詳細は不明である。

I区南部では中世のある時期に鐵鍛冶や鋳鋼など金属生産がおこなわれており、造寺あるいは改修に関わって設置された工房が存在していた可能性が高い。（小池伸彦「興福寺西室出土冶金関連遺構・遺物の再検討」〔前掲〕）。

#### v. II区近世遺構群

**方形土坑SK10630～10633** II区で方形土坑を

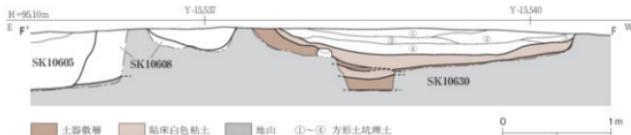
4基検出した。SK10633はII区北端にあり、さら



第16図 鉄鍛冶遺構SK10453・10456 平面図 1:30

に北に続く。その南のSK10632は後述の長方形土坑SK10645に壊されているため、部分的な検出にとどまる。両土坑とも一辺1.8m前後の方形で、深さ約30cm。

SK10630は、一辺2.6m前後のはば正方形で、深さは約40cm。形態は堅穴建物状で、白色粘土の貼床をもつ。平面と床面の重複から少なくとも2度の改修がある。詳細に調査した最も新しいものでは、貼床とその下の多量の土師器を重ねて埋めた土器敷きを確認し、貼床面を掘り込む小穴を4基確認した（第18・19図）。小穴はいずれも径15cm前後、深さ10cmほどで柱穴かどうか判然としない。貼床と土器敷きは2時期分が重なる（第17図）。上層の貼床は厚さ10cm前後、土器敷きは厚さ5cm前後で、下



第17図 方形土坑SK10630 土層図 1:40



第18図 方形土坑SK10630 検出状況（西から）



第19図 方形土坑SK10630 贴床下土器敷様状況



第20図 II区北端近世遺構群検出状況（北から）

層の貼床は厚さ15cm。土器敷きは厚さ10～15cm前後である。土器敷きに含まれる土器の年代は、いずれも17世紀後半から18世紀前半までである。この年代観によると、SK10630の構築は、西室大房焼失の年代（1717年）より遅る可能性があり、大房と併存していた可能性がある。

SK10631は長軸約2.1m、短軸約1.9mで深さ約0.9m。これらの方形土坑からは、土器が比較的多く出土するのみであり、出土遺物から機能は推定しがたい。ただし、一辻1.8～2.6mという規模や、明らかに床面を意識したSK10630の貼床の構築状況から、貯蔵施設等の機能をもつ施設と考えられるが、形態が少しずつ異なっておりそれぞれ別個の性格を有していた可能性もある。

**土器師廐棄土坑SK10634**　II区北端で検出した径約1.5m、深さ30cm程度の円形土坑。完形の土師器が多量に出土した（第20図）。廐棄土坑と考えられる。土器師は18世紀中頃のものと考えられる。

**電SL10635～10640**　II区北端付近に6基確認した。これらは西室大房SB10450の墓壇外装を壊して造られており、大房廐絶後の遺構である。平面形状が長軸70～90cm、短軸50～70cmの小形円形で、一端が開く。この開いた部分が焚口と考えられる。底面には木炭片が広がり、側壁は被熱により赤化する。ただし側壁の立ち上がりは、後世にはほとんど削平されている。形態的には大きく次の2つに分かれる。すなわち、電SL10635・10636の2つは、2基が一連となり、平面形状がメガネ状になる。もう1つは、SL10638～10640のように1基単独のものである。両者は焚口と煙り出しの方向が異なり、前者ではその方向が西→東のものと南→北のものがあるのに対し、後者では西→東のみである。前者の2連の電では双方が重複しており、その前後関係は南北方向から東西方向となる。

**埋甕土坑群SX10641～10643**　II区西南部で計11基の土坑を検出し（1基はII区南壁にかかる）、3基から4基を1単位として南北に並ぶ。土坑の大きさは、径50～80cm、深さ30～50cmで、うち2基から陶質の甕が出土し1点はほぼ完形であった。これらは、水甕群あるいは便所の可能性がある。

**近世道路SF10644**　II区の東端部に北東～南西方向の斜行溝2条と、これに挟まれる小礫敷面を検出した。これは「奈良町絵図」（19世紀前半）などの資料から北円堂への参道と考えられ、2011年度におこなった北円堂院の調査で確認したSF9975に接続する可能性がある。

#### v. 近代以降の遺構

**長方形土坑SK10452・10453・10645**　調査区の各所に認められる深さ1m以上の長方形土坑。SK10452と10453はI区で検出された。長軸約4.5～5m、短軸約1.2m、深さ約1.2m。SK10452は南北方向を（第21図）、SK10453は北東～南西方向を向く。SK10645はII区の中央やや北寄りで検出した。長軸約5.5m、短軸約1.1m、深さ約1.2mで、長軸が北西～南東方向を向く。

これらの土坑の短軸は、緩やかな傾斜で立ち上がり、斜面を階段状に形成する。また、底面に瓦片を敷くことで共通する。出土遺物にガラス瓶など近現代の遺物を含む。太平洋戦争時の防空壕と考えられる。



（芝・香 光） 第21図 長方形土坑SK10452検出状況（北から）

### (3) 北円堂院の遺構

#### i. 北円堂院に関わる遺構

北面回廊SC9955 存在を想定していた8基の礎石抜取穴のうち、検出したものは南側柱の2基(SPI10660・SPI10661)である(第23図)。南側柱の残り2基は、巨大なカシ樹根下あるいはその近傍にあり、検出できなかった。また、北側柱の全ての礎石は、後述する近世以降の土坑群に壊され、確認できなかつた。調査前に樹根付近に見えていた安山岩巨礎は、ほぼ礎石想定位置にあるものの、後世に動かされた痕跡が認められた(第26図)。検出した抜取穴の平面形は、ほぼ円形で径60×80cm程度、深さは検出面から約20cm。抜取穴からは瓦片が少量出土した。2基の柱間寸法は、「概報VI」の想定どおり96尺と推定できる。

基壇 基壇の築成方法は、Ⅲ区の東西で異なる。東半では、基本的に基盤層の礫混じり明黄褐色土を削り出して造る。一方、西半ではこの基盤層が西方に向かって急激に標高を下げる。この基盤層上に、褐色土や暗褐色土などを比較的厚く積む(約1.1m)。その後、少なくとも地覆石よりも約1m外側まで版築を施し、地覆石を据えたのち基壇の高まり部分に版築をおこなう(第22・24図)。基壇部分の版築は、黄褐色粘土と黄褐色砂質土を5cmほどの厚さで互層に積む。後述する近世以降の土坑群によって基壇北半は完全に壊されている。

基壇外装は北面回廊基壇南面の一部で、地覆石と羽目石を確認した(第25・27図)。これは1975・76年の境内防災設備工事にともなう発掘調査で確認していたもので、今回は再検出となる。地覆石は5石、羽目石は1石が残り、地覆石はそれぞれ幅30~50cm、奥行15~20cm、高さ12~15cm、羽目石は幅48cm、奥行12cm、高さ18cmである。いずれも地獄谷産凝灰岩の切石を用いる。これらの切石が残っていない部分では、抜取溝を確認した。しかし、地覆石の破片らしき凝灰岩片が残存する箇所では、据付痕跡を確認できなかつた。これは、基壇造成の過程で据付溝などを掘らずに地覆石を据えたためと考えられる。

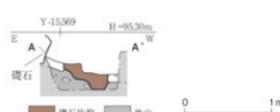
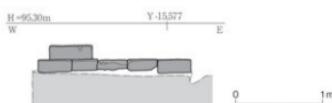
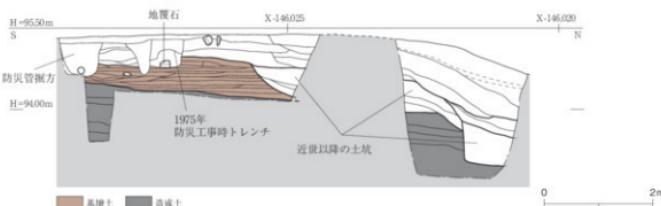
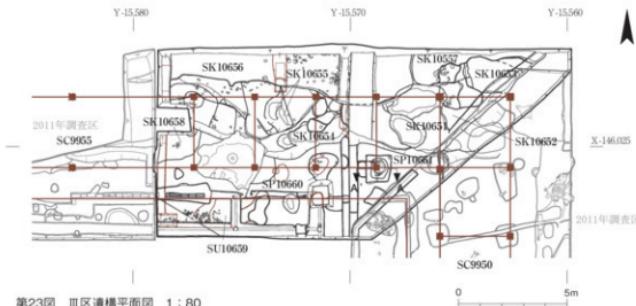
瓦瀬SU10659 Ⅲ区西南部、基壇外装より南側で検出した。基壇土の上層を切り込み、径3mの範囲に瓦片がまばらに広がる。中世の土師器や瓦器を含む。

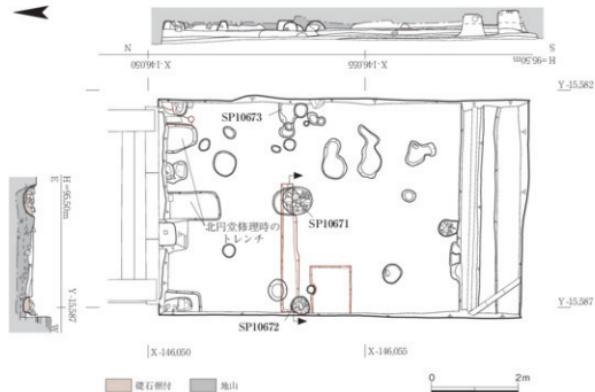
燈籠基礎据付穴SP10671~10673 Ⅳ区において北円堂南面に3基検出した(第29図)。SP10671は南面階段の中軸ライン上にほぼのり、階段最下段の踏石南端から約3.2m、北円堂基壇地覆石外縁から約4.6mの位置で検出した。またその他の2基は、SP10671と東西軸を揃え、SP10671から西に約2.5mの位置でSP10672を、東に約2.1mの位置でSP10673を検出した。位置と大きさから、いずれも燈籠の据付穴と考えられる。SP10671は径60cm×90cm、深さ25cm(第30図)、SP10672は径60cm、深さ20cmである(第31図)。SP10673は、正確な大きさは分からぬが、SP10672とほぼ同規模と考えられる。3つの据付穴には径5

~10cm前後の円礫(花崗岩、チャート、流紋岩)が充



第22図 Ⅲ区西壁南端断面(東から)





第29図 IV区遺構平面図 1:100



第30図 SP10671検出状況（北西から）



第31図 SP10672検出状況（東から）

填されており、SP10671からは奈良時代後半の須恵器環が出土した。基礎据付穴3基は大きさに違いが認められるものの、埋土や検出面に共通している。現状では同時併存かどうか検証できない。

その他、調査区北辺には、北円堂正面の仮設屋根のもとと考えられる礎石が東西に4基並び、そのやや南に北円堂の1952～1955年修理時の足場と考えられる掘立柱穴が認められる。

#### ii. その他の遺構

近世・近代の土坑群SK10651～10658 III区北辺に大小10基の土坑を検出した（第24・28図）。大きなものは、調査区の幅を超えて、深さは約2mに達し、小さなものは1m前後、深さ50cm程度で、これらが重複して掘られている。これらには多量の土器と瓦を含める。遺物からこれらの土坑のはほとんどは近世以降のものと考えられる。特に、土坑SK10651からは、19世紀第3四半期に位置付けられる多数の陶磁器類のほか、瓦、鉄釘などの金属製品、貝殻など食物残滓が出土した。この上面には、大正11年（1922）の銭貨を含む造成土（黒色土）がのる。

（芝）

## 4 出土遺物

### (1) 土器・陶磁器

#### i. 西室およびその周辺の土器・陶磁器

I 区からは、古代の須恵器・縁釉陶器なども若干出土しているが、全域で鎌倉時代から室町時代にかけての土師器皿が大量に出土した。胎土が橙褐色を呈する鎌倉時代の土師器皿の多くが全体の形状をとどめているのに対して、赤褐色や灰白色を呈する室町時代の土師器皿は、ほとんどが破片化している。

II 区では、整理用コンテナに約80箱の土器・陶磁器が出土した。平安・鎌倉時代にまで遡る遺物も少数認められるが、多くは江戸時代のもので、特に土師器皿が目立つ。以下、主な遺構からの出土品について記す。

**小土坑SP10441** 須恵器の杯 A (第32図1)・鉢 (2)・双耳瓶 (3) がある。土師器供軀具をともなわないので、時期を細かく絞り込むことは難しいものの、1・3は奈良時代前半から半ばの採業と目されている加茂古窯跡群の西門窯跡出土品に類似があり、2とともに8世紀代のものと見なして差し支えない。

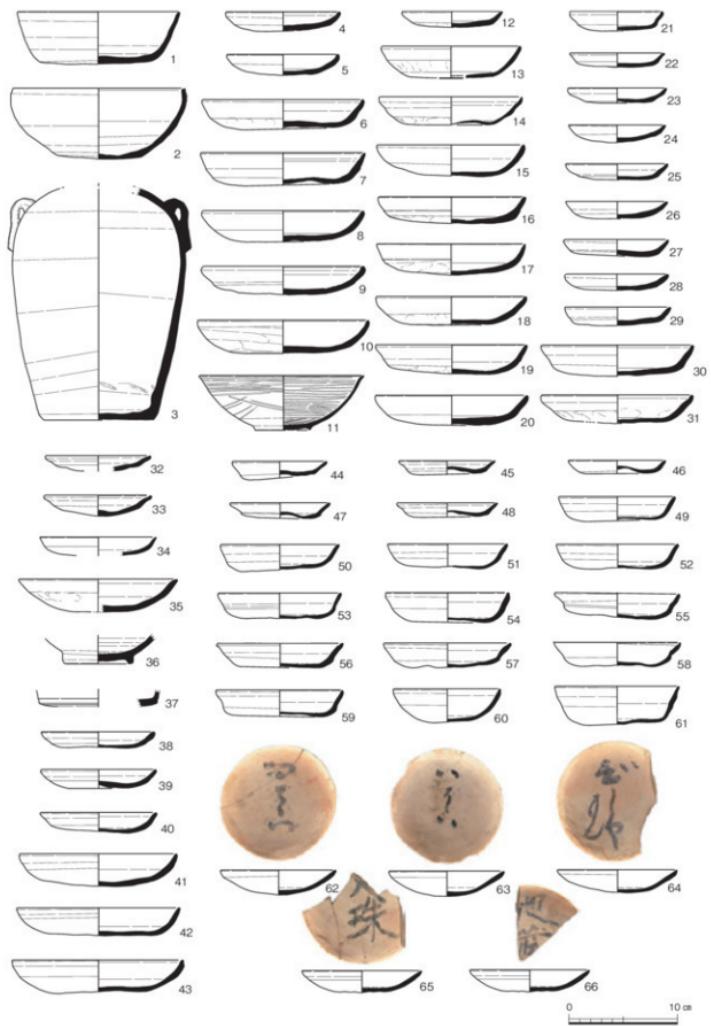
**土器溜SU10446** ほぼ完形の土師器皿 (4~10) 多数に、少量の瓦器椀 (11) がともなう。土師器皿は、口径15cm前後と口径10cm強の大小2群があり、量的には大皿が多い。大皿 (6~10) は、口縁部外面に2段にわたってナデ調整が施されているのに対して、小皿 (4・5) はナデ調整が一段しか施されておらず、灯明皿として用いられた痕跡の認められるものもある。10の大皿は、底裏および周辺にヘラ削りが施されている点で特異。伴出の瓦器椀は、薄手化している点に川越俊一氏の分類 (川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』同朋舎出版、1983) による第Ⅲ段階以降の特徴を見出すことができるが、口径は約15cmと大きめで、第Ⅲ段階A型式でも古相を示す。土師器皿と瓦器椀の特徴から、12世紀後半頃のものと考えられる。

**土器溜SU10442** ほぼ完形の土師器皿 (12~20) が多数出土した。胎土は橙褐色で、口径14cm前後の大皿 (13~20) が多いが、口径9cm強の小皿 (12) を少量含む。いずれも口縁部に一段のナデ調整が施されている。調整手法と口径分布から、13世紀前半頃のものと考えられる。

**土器溜SU10443** 土器溜SU10442と同様に、胎土が橙褐色の土師器皿 (21~31) がほぼ完全な状態でまとめて出土した。形質的特徴の共通性から、SU10442出土品とはほぼ同時期のものと考えられるが、大皿 (30・31) よりも小皿 (21~29) が多い点で異なる。

**土坑SK10620** 土師器皿 (32~35) のほか、白色土器の椀 (36) と縁釉陶器の小片 (37) が出土した。土師器皿には、口縁部が「て」の字状とも形容される独特的の形状を呈する一群 (32・33) と、外反する一群 (34・35) があり、後者には口径15cm前後の大皿 (35) と口径11cm前後の小皿 (34) が認められる。縁釉陶器 (37) は器形を特定することが難しいが、内面が二次的に被熱しているように見受けられ、香炉の体部ではないかと推定される。土師器皿の形態的特徴から、11世紀末ないし12世紀初頭頃の遺物群と考えられる。

**土坑SK10605** 土師器皿 (38~43) を主体とするが、少量の瓦器椀・皿をともなう。土師器皿は、基本的に口縁部に二段のナデ調整が施されているもので、口径15cm前後と口径11cm弱の大小2群に法量分化する。SK10620出土品と比べると、概して口縁部が内厚する傾向にあり、後出の要素が強く認められるが、外反する口縁部を有する個体も少数含まれている。12世紀前半頃のものと考えられる。



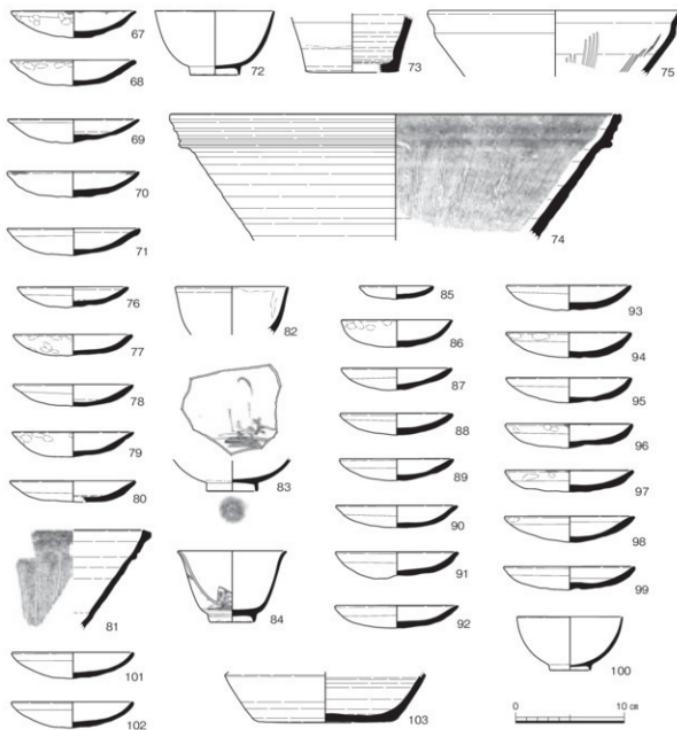
第32図 西室出土土器（1） 1：4

**円形土坑SK10600** 南都（奈良）の中世土器に特徴的な、赤褐色の胎土を有する皿（44～61）がまとまって出土した。径高指数（口径+器高×100）25未満の浅手の一群（44～59）と、径高指数30前後の深手の一組（60・61）に大別でき、浅手の一組は口径9cm前後と口径12cm前後の大小2群に法量分化する。深手の一組にも口径10cm前後の小型品（60）と、口径12cm弱の大型品（61）があるが、浅手の一組と比べて極端に個体数が少ない。胎土の上で顕著な違いは認められず、いずれも口縁部外面に1段もしくは2段のナデ調整が施されている点で共通するが、深手の一組は全般的に丁寧に作られている。層年代推定の材料となる共伴遺物を欠くが、土師器皿の様相が近似する奈良市教育委員会平城京第559次調査SK638・639出土品（奈良市教育委員会「南都出土中近世土器資料集—奈良市高天町遭跡（HJ第559次調査）出土資料一」、2014）の中に、京都近郊産と目される土師器皿がともなっていることが手がかりとなる。SK638・639出土の京都近郊土器皿は、貞和元年（1345）に光明天皇から寺地を賜り、京都六条堀川に創建された本國寺の造営に際して埋められたと考えられる楊梅小路南側溝出土品（京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京六条二坊五町・猪廻殿跡・本國寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』、2012）との類似性が高く、概ね14世紀前半のものと考えられるので、SK10600出土土器についても、ほぼ同時期のものと考えることが許されよう。

**土坑SK10613** 口径11cm前後の土師器皿（62～66）がまとまって出土した。元和年間（1615～24）頃の陶磁器が共伴した興福寺旧境内（平城第539次）SK10547出土品（石田由紀子ほか「興福寺旧境内の調査—第539次」「奈良文化財研究所紀要2015」、2015）と胎土・成形手法が比較的似ているが、口径が若干縮小している点でやや新しいと考えられ、17世紀でも半ばから後半頃のものと推定される。内面に、「みはい」（62）「いはい」（63）「びしゃもん」（64）「文珠」（65）「地藏」（66）といった墨書の認められるものを含む。墨書の内容からみて、仏事に使用されたものであろう。

**方形土坑SK10630** 4層に分かれる埋土のうち、ほとんど遺物を含まない③層を挟んで、下層の④層と上層の①・②層からの出土があり、複数個体で破片の直接接合が確認できた①・②層出土品については一括する（埋土名称は第17回参照）。④層出土品には、土師器皿（第33回67～71）、肥前地域産の白磁碗（72）、鉄軸壺（73）、信楽焼の擂鉢（74）、瓦器擂鉢（75）があり、①・②層出土品には、土師器皿（76～80）、信楽焼の擂鉢（81）、肥前内野山窯系の綠釉陶器碗（82）、高台内に「富永」の印鉢をもつ京焼風の肥前陶器碗（83）、肥前磁器の染付碗（84）などがある。67・70は灯明皿として用いられたらしく、口縁部に煤が付着している。①・②層出土の土師器皿は、口径がわずかに小型化している点に④層出土品よりも年代的に後出する要素を見いだすこともできないではないが、共伴した陶磁器に際立った年代差は認められない。①・②層から出土した信楽焼擂鉢（81）、肥前地域産の施釉陶器碗（82・83）といった国産施釉陶器類は、宝永5年（1708）の大火にともなう整地層に覆われていた平安京左京北辺四坊穴蔵FI387出土品（京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京北辺四坊」、2004）と高い共通性を示しており、18世紀初頭頃のものと考えられる。なお、貼床下や重複（先行）する2基の方形土坑からも大量の土師器皿が出土しているが、形質的にはSK10630の埋土出土品との間に顕著な差異は認められない。

**土坑SK10634** ほとんどが土師器皿（85～99）で占められているが、肥前地域産の白磁碗（100）などをわずかにともなう。土師器皿の胎土は、概して緻密で、淡い黄橙褐色を呈するものが多い。法量的には、口径7cm前後の小皿（85）、口径10.5cm前後の中皿（86～93）、口径12cm前後の大皿（93～99）に3区分でき、大皿の口径は方形土坑SK10630の①・②層出土品に近似するが、口縁部内面に残るナデ痕跡の幅が極端に狭くなっている点に違いを見いだすことができる。伴出の白磁碗も、SK10630④



第33図 西室および北円堂院出土土器（2） 1：4

層出土品と較べて全体に浅手で、高台も低くなっているなど、伊万里焼と呼ばれる肥前地域産の磁器碗としては、18世紀半ば以降の特徴を示す。

**竈SL10637** 理土から、ほぼ全形を復元し得る土師器皿（101・102）が2個体出土した。形質的には、土坑SK10634出土の大皿との共通性が高いが、いずれも口径11.3cmと小ぶりであることから、やや遅る時期のものと考えられる。

#### ii. 北円堂院の土器・陶磁器

Ⅲ区からは、整理用コンテナケースに30箱あまりの土器・陶磁器が出土した。瓦瀬SX10659などから、中世に遡る土師器や瓦器の細片も出土しているが、江戸時代後期の土器・陶磁器が圧倒的に多数を占めており、特に土坑SK10651からの出土量が多い。SK10651からの出土品には、端反り碗など19

世紀第3四半期頃に位置付けられる国産磁器碗は少数しか認められないが、19世紀前半以前に遡ると考えられる肥前磁器碗・皿類や漆巻き補修痕をもつ器物がすこぶる多く含まれている。茶道具の水指や南紀男山焼の煎茶碗といった特徴的な遺物が目立つことからも、日常の雑廄棄物とは考えにくく、明治時代初期に廃仏毀釈に関連してまとめて投棄されたものとみられる。

IV区からは、整理用コンテナケースに2箱分の土器・陶磁器が出土したのみで、燈籠据付穴SP10671から出土した須恵器（第3図103）以外にめぼしい遺物はない。103は、頸部を欠いているが平瓶とみられ、肩部に強い屈曲をもつ独特の形状から、奈良時代のものと考えられる。（尾野善裕）

## （2）瓦磚類・土管

### i. 西室出土瓦磚類および土管

西室の調査では古代から近代までの多くの瓦磚類が出土した（第3表）。軒瓦の出土量としては、中世のもののがもっとも多く、次に平安時代、奈良時代と続く。奈良時代では軒丸瓦は6301A、軒平瓦は6671Aの出土が目立つ。6301A-6671Aは興福寺創建瓦であり、これらが創建西室用の組合せである可能性が考えられるものの、奈良時代の軒瓦の型式はほかにもいくつか出土しており、断定はできない。また、平安時代以降の軒瓦も多数出土しているが、特定の型式には偏っておらず、西室で用いられた軒瓦の組合せは特定できなかった。以下、西室大房SB10450や掘立柱建物SB10440の年代を検討する上で重要と思われる軒瓦と土管について報告する。

軒瓦に関しては、遺構にともなうものと遺存状態の良いものを中心にあげた（第34図）。1・2は奈良時代の軒丸瓦。1は6301Aで興福寺創建瓦。2は6308Aa。平城宮所用瓦だが、興福寺や西隆寺など寺院でも出土例がある。3～8は平安時代。

3・5・6は複弁蓮華文軒丸瓦。3は中房周間に葉状の文様をもつ。6は外縁に鋸歯文と珠文をもつ。平安時代前期。4・7は單弁重弁蓮華文軒丸瓦。4は蓮弁の間に間弁をもつが、7は蓮弁のみで間弁をもたない。8は素弁蓮華文軒丸瓦。9・10は中世の「興福寺」銘軒丸

第3表 西室調査区（I・II区）出土瓦磚表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種	点数	型式	種	点数
6234	Ab	1	6561	A	1
6235	F	1	6671	A	6
6301	A	11	L	1	
	I	1	丸瓦（刻印）	26	
6307	J	1	6682	D	4
6308	Aa	1	6732	Fa	1
奈良	4	6739	A	1	4
平安	21	6763	C	2	鬼瓦
古代	8	奈良		3	鬼瓦（平安）
鎌倉	2	平安	44	切削斗瓦（古代）	3
巴（鎌倉）	23	古	6	切削斗瓦（中世）	2
宝町	2	鎌倉	10	削頭斗瓦（中世）	1
巴（室町）	4	室町	6	削斗瓦	3
中世	39	中世	47	面戸瓦	40
巴（中世）	92	近世	15	面戸瓦（古代）	5
巴（中世）	9	時代不明	4	面戸瓦（中世）	3
近世	7			磚（繩刻）	1
巴（近世）	15			雁振瓦	4
近代	1			伏間瓦	2
巴（近代）	1			鳥糞瓦	1
時代不明	9			楕飾？	1
				日板瓦	6
				隅木蓋	1
				瓦頭円盤	2
				用途不明道具瓦	16
軒丸瓦計	253	軒平瓦計	155	土管	75
丸瓦	6827kg	平瓦	1325.8kg	磚	196kg
点数	5292				

第4表 北円堂院調査区（III・IV区）出土瓦磚表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	点数	型式	点数	種類	点数
平安	4	平安	3	軒丸瓦	11
中世	3	鎌倉	1	菊丸	5
巴（中世）	21	室町	2	丸瓦（刻印）	6
近世	7	中世	6	平瓦（刻印）	6
巴（近世）	46	近世	29	隅切平瓦	1
時代不明	6	時代不明	3	鬼瓦（中世）	10
				切削斗瓦（中世）	5
				削削斗瓦（中近世）	5
				箱頭斗瓦	4
				伏間瓦	4
				雁振	7
				鳥糞	2
軒丸瓦計	87	軒平瓦計	44	日板瓦	14
丸瓦	156.01kg	平瓦	497.20kg	磚	5
点数	468点			凝灰岩	
				隅木蓋	5
				瓦製円盤	1
				用途不明道具瓦	11

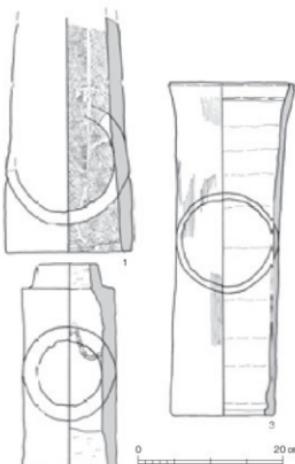


第34图 西室出土軒瓦拓本 1:4

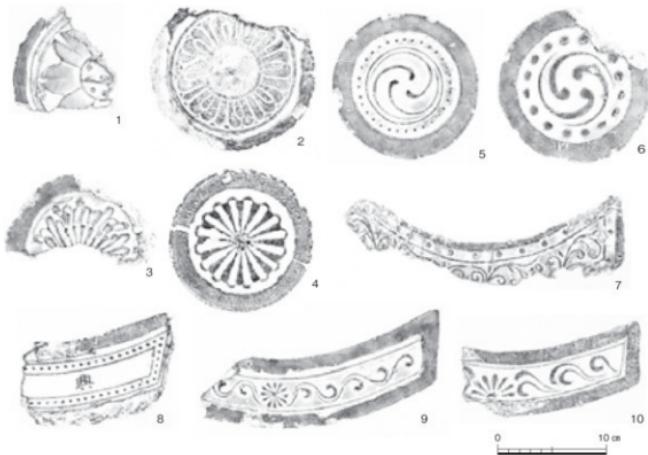
瓦。9は鎌倉時代、10は瓦当中央に菊花文の刻印をもつことから室町時代のものである。11～14は左三巴文軒丸瓦。11・12には瓦当中心に珠点がある。平安時代末から鎌倉時代。13・14は鎌倉時代、15は鎌倉時代から室町時代。16は鎌倉時代の右三巴文軒丸瓦。17・18は奈良時代の軒平瓦。17は興福寺創建瓦の6671A。18は興福寺所用瓦の6682D。19～23は平安時代。19は外区に珠文をもつ唐草文軒平瓦。20は偏行唐草文軒平瓦で薬師寺や平等院で同范例がある（奈文研『薬師寺発掘調査報告』、1987）。21は中心飾りに四葉宝相華文をもつ重部文軒平瓦。22は植物文軒平瓦。23は均整唐草文軒平瓦で中心飾りに菱形の文様をもつ。平安時代後期。24は鎌倉時代の「興福寺」銘軒平瓦。25は連珠文軒平瓦。鎌倉から室町時代。26～28は室町時代の均整唐草文軒平瓦で中心飾りに半裁した菊花文をおく。

出土地点に関しては、3～5、12～14、20が西室大房SB10450の礎石抜取穴から出土した。SB10450礎石抜取穴からはここにあげたほかに軒瓦の小片が出土しているが、すべて奈良時代から鎌倉時代にかけてのものである。また、掘立柱建物SB10440抜取穴からは16、土管暗渠SD10430からは25、同じくSD10430の土管抜取溝からは15が出土した。その他の造構としては、2・6・17が土坑SK10621、9がSKI10614、22・26が方形土坑SK10630、23が土坑SK10618、24が竈SL10638（竈内廃棄）、27が南北溝SD10434、28が土坑SK10439から出土した。それ以外は、8・11が中世以降の整地土から出土したほかは、すべて包含層もしくは表土から出土したものである。

次に、土管について述べる。西室では土管を用いた暗渠を複数検出した。土管は造構ごとに異なる形態をもつ（第35図）。1は行基式丸瓦円筒土管（以下、行基土管）。粘土板を模骨に巻き付けて製作しており内面の布目は粗く、吊り紐はない。平安時代以前とみられる。土管暗渠SD10438出土。ほかにも行基土管は土管暗渠SD10435、10436で用いられる。2は玉縁式丸瓦円筒土管（以下、玉縁土管）。広端部内面を約5cmの幅で大きく削り、土管が連結しやすいうようにする。内面には吊り紐痕が残り、吊り紐痕が布袋内面に通し縫いされていること、吊り紐の内外の比率が、1：5～1：7であることから14世紀中頃から後半のものであろう（山崎信二「中世瓦の研究」奈文研、2000）。このほかにも玉縁土管としては内面の吊り紐痕が玉縁部と胴部の2ヶ所あり、狹端内面を段状に削るものがある。2と同時期と考えられる。3は片側がソケット状の離ぎ手をもつ土管（以下、ソケット土管）で、丸瓦円筒を転用したものではなく、専用の土管である。粘土紐を巻き上げて作られており、外面にはカキ目をもつ。奈良市古市城で出土した16世紀の土管と形態や製作技法が類似しており、これと近い時期のものと思われる（奈良市教育委員会「古市城の調査」「奈良市埋蔵文化財調査報告書」、1989）。2・3は土管暗渠SD10430出土。SD10430では、玉縁土管とソケット土管とを混用しているが、玉縁土管列の中にソケット土管が部分的にあっており、後者が後世の補修とわかる。ほかにも土管暗渠SD10431には玉縁



第35図 西室出土土管実測図 1：6



第36図 北円堂院出土軒瓦 1:4

土管が、土管暗渠SD10432にはソケット土管が用いられていた。またSD10430・10431・10432には土管保護のために上面に丸瓦や平瓦が乗せられていた。これらの一部には室町時代の瓦の特徴である菱形や円形、菊花形の刻印が確認でき、掘立柱建物SB10440の廃絶年代を考える上で重要である。

#### ii. 北円堂院出土瓦神類

北円堂院から出土した瓦神類は第4表のとおりである。ほとんどが近世から近代にかけてのもので、古代のものはわずかである。特に土坑SK10651、SK10656からは近世から近代までの瓦が数多く出土した。

第36図1は素弁蓮華文軒丸瓦で平安時代。2は單弁八弁蓮華文軒丸瓦。平安時代後期。3は興福寺一乘院所用の一乘院草文で江戸時代初期のものである。4は十六弁菊文軒丸瓦。江戸時代。5は左三巴文軒丸瓦。内区の巴文が非常に細く、外区の珠文も小さい。6は右三巴文軒丸瓦。5・6ともに江戸時代。7は均整唐草文軒平瓦。東大寺式に似た文様構成をもつ。平安時代初期。8は興福寺銘文軒平瓦。西室で出土した第36図24に似るが、外区の珠文が小さい。鎌倉時代か。9は菊花唐草文軒平瓦。10は菊水文軒平瓦。9・10は室町時代。1が北面回廊基壇土にのる包含層、2が整地土。3・5・6・8・9がSK10656、4がSK10651、7がSK10656の上にのる黒色土より出土した。

(石田由紀子)

### (3) 金属製品・錢貨

#### i. 西室出土金属製品・錢貨

鉄釘が103点、鉄錐5点、鉄刀片2点などが出土した。鉄釘には、丸釘・角釘の両方を含む。角釘には方頭釘が3点みられるが、その他はほとんどが小片で頭部形状がわかるものはほとんどない。造構に関わるものとして、土坑SK10618から鉄角釘2点、土坑SK10621から鉄角釘2点、円形土坑

SK10600から鉄角釘 1 点、SK10630から鉄角釘 2 点、鉄丸釘 10 点、SK10632から鉄角釘 11 点、鉄丸釘 2 点がある。鉄鏡は、表土からではあるが完形品が出土しており、長さ 14.2 cm、幅 4.1 cm。

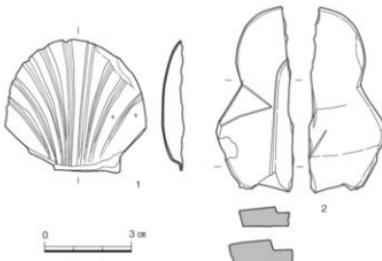
また、II 区の基盤層上位の包含層からの出土ではあるが、銅製の垂木先金具片と思われる板状品が 1 点出土した。長さ約 3 cm 程度で、全体形状は不明である。

錢貨では、SB10450 の礎石（二十一）の周辺で寛永通寶 6 点と北宋錢（崇寧通寶）1 点が出土した。

#### ii. 北円堂院出土金属製品・錢貨

近世土坑群から鉄釘などが多く出土した。遺構に関わるものとして、SK10651 からは銅キセル雁首 1 点、青銅製貝杓子 1 点、鉄角釘 4 点が、SK10656 からは鉄角釘 28 点、鉄丸釘 3 点、鉄鏡 5 点、鉄座金 11 点がある。第37図 1 は、貝杓子である。厚さ 0.5 mm の銅板を用いて、イタヤガイ科の貝殻を模して作られたものと考えられる。中央右よりに柄の緊縛用と見られる 0.5 mm の小孔を 2 つ穿つ。縦 4.6 cm、横 5.0 cm。貝杓子には貝殻をそのまま用いるものと金属製とするものの 2 種があり、銅製のものの類例として、東京都汐留遺跡（東京都生涯学習文化財団編『汐留遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター、2000）がある（これが貝杓であることその類例については、國學院大學の阿部常樹氏よりご教示いただいた）。このほかに鉄角釘 3 点、鉄丸釘 25 点が出土した。いずれも表土あるいは擾乱からの出土である。

錢貨では、近世土坑群から延喜通寶 1 点、寛永通寶 3 点、琉球錢（世高通寶）1 点が出土した。また、近世土坑群の上にのる黒色土から一錢銅貨（大正 11 年、1922）が出土した。



第37図 出土金属製品・石製品 2 : 3

#### (4) 冶金関連遺物

I 区の土坑 SK10453 からは、鋳型片、銅取瓶片、銅津、粒状津、鍛造済片などが出土した。これらの大部分は、埋土の水洗選別によって検出したもので、いずれも小片である。この周辺では表土からではあるが、埴輪片が出土した。また、II 区の土坑 SK10613 や SK10621 からは褐色鉄津片やガラス質鉄津片が出土した。前章で述べたように I 区東南付近では、西室大房再建に関わる、鉄鍛冶や鋳鋼などの金属生産活動がおこなわれていたと考えられる。

#### (5) 石製品

I・II 区からは砥石片、石硯片、滑石製石鍋片（底部片）などが出土した。砥石はいずれも小片で、表土、包含層からの出土である。第37図 2 は石硯。粘板岩製で、上側辺部分が残存し墨堂の一部が認められる。下方に向かって厚みを増す。側縁部は連弧状に整形する。表面には墨痕が残る。西室大房 SB10450 南妻中央の「ハ一」砥石抜取穴出土。（芝）

## (6) 動物遺存体

Ⅲ区で検出した土坑SK10651やそれを覆う黒色土から、57点の動物遺存体が出土した（第38図、第5表）。土坑SK10651からは、マシジミ、アカガイ、ハマグリ、アワビ属、バイなどの貝類やマダイの歯骨、種は不明であるが鳥類の上腕骨が出土した。黒色土からもハマグリ、アカガイ、マシジミ、クロアワビ、アワビ属などが出土している。出土した動物遺存体は食用となる種ばかりで、鳥類の上腕骨には解体痕跡も多数認められたことから、食糧残滓と考えられる。貝類は大型個体が多いことが特徴的であり、殻長12.1cmのアカガイや殻長13.5cmのクロアワビも認められた。マシジミ、ハマグリ、アカガイは貝合わせができる個体も多く認められ、廃棄単位の保存性が高いことが示唆される。また、土坑SK10651と黒色土の動物遺存体は平面的に同じような場所から出土しており、様相も共通することから、同じ遺構に由來した資料群の可能性がある。

土坑SK6051は、北円堂院の北面回廊基壇を壊して掘られており、土器など遺物の様相から、19世紀第3四半期の廃仏毀釈にともなった廃棄物と考えられる。この頃の興福寺には、興福寺の僧侶だけでなく、明治政府の役人や藩兵も駐屯していた。例えば、明治維新期の興福寺僧・宗円の日記によると、興福寺境内の事例ではないが、慶応4年（明治元年、1868）8月17日の奈良府判事の新任教持には、小觸垣燒、はも、味噌汁などが夕飯に出されている（奈文研歴史研究室の吉川聰氏よりご教示いただいた。吉川聰『東大寺図書館所蔵 中村純一寄贈文書調査報告書』、2014）。今回出土した動物遺存体は、こうした廃仏毀釈の混乱の中で廃棄された食料残滓であり、当時の状況を物語る貴重な資料といえる。

（山崎 健）

第5表 Ⅲ区出土動物遺存体一覧表

種名・部位名	土坑SK10651 (左／右)	黒色土 (左／右)
クロアワビ	0	1
アワビ属	1	1
バイ	1	0
巻貝種不明	1	0
アカガイ	3／3	6／2
マシジミ	6／7	2／1
シジミ科	3／0	0／2
ハマグリ	3／2	7／3
マダイ歯骨	0／1	0
鳥類種不明 上腕骨骨幹部	1	0

第38図 Ⅲ区出土貝類

## 5 結語

### (1) 西室の調査成果

#### i. 西室の造営と建築

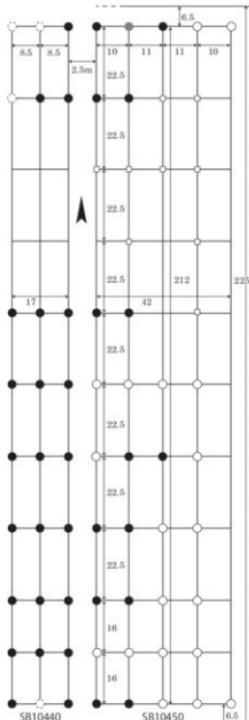
西室大房SB10450の建物規模と基壇の南北規模が確定  
梁行4間、約12.4m(42尺)の南北棟礎石建物である(第39図)。梁行の柱間寸法は、南2間が約4.8m(16尺)で、それ以北が約6.6m(22.5尺)である。基壇規模は南北が約66.5m(225尺)で、基壇の出は南北それぞれ約1.9m(6.5尺)である。基壇の東西規模は明確ではないが、東南隅の様相から東面の基壇の出も、約1.9m(6.5尺)であると考えられる。基壇西面は、当初から存在しなかったのか後世に失われたのか、今回の調査では不明である。基壇の北面、南面、東面の一部では基壇外壁の地覆石と羽目石が遺存しており、これらにはすべて二上山産凝灰岩を利用している。これらから、基壇高は約40cmに復元できる。また、南面のみに雨落溝と考えられる石組溝を確認した。

今回の調査で得られた上記の西室大房の建物規模は、従来の復元案とは異なる。第2章(5頁)で述べたように、復元案には大岡案と鈴木案があり、梁行は4間、総長45尺は両案が一致するが、桁行については、大岡案は9間、22.5尺等間(総長202.5尺)、鈴木案は11間のうち北6間を22.5尺、南5間を15尺(総長210尺)としていた。両者は『流記』の記述や地表面に露出した礎石の位置等を根拠としている。今回の発掘調査により、梁行は4間で同じだが、総長42尺で既復元案よりもやや短く、桁行は、柱間数・柱間寸法とも既復元案とは異なる部分も多いことが判明した。また、礎石位置を変更した痕跡は確認できず、再建に際しても、創建以来の建物規模を踏襲していたと考えられる。ただし、この場合、『流記』に記された建物規模とは一致しない点が問題となる。

小子房の可能性がある掘立柱建物SB10440を確認

西室大房SB10450の西側に並列して、古代に遡る建物SB10440を確認した。桁行10間、梁行2間の南北棟掘立柱建物で、桁行の柱間寸法を大房と揃える。建物の位置や規模から大房と対をなす小子房の可能性があるが、これを小子房とするには、大房との関係から次の問題がある。

西室大房は、桁行10間、約62.5m(212尺)、



● 創建時の礎石・柱穴が残存するもの  
● 磚石の埋め替えが認められるもの  
○ 後世に移動あるいは抜き取られたもの  
○ 後世の遺構や樹根により確認できなかったもの  
□ 未調査部分の残存礎石  
※数字の単位は尺(標準尺=0.295m)を示す(m表記は略)。

第39図 西室建物の柱位置と柱間寸法

**西室大房と掘立柱建物SB10440の関係** まず、大房SB 10450 と掘立柱建物SB 10440の間は、側柱の心心間距離で約25mと狭く、両者が併存した場合、軒が干渉するか上下に重なることになる。西室大房と小子房の両方が描かれる絵画資料には、鎌倉時代後期の「興福寺堂舎図」(水室神社蔵)や、室町時代の「春日社寺曼荼羅」(興福寺藏) (第40図)等があるが、いずれも両者の間には3、4間の繫廊が描かれており、今回検出した建物配置とは異なる。古代の大房と小子房のあり方については、現存する法隆寺東室と妻室、発掘調査で確認した薬師寺東西僧房の例があり、大房と小子房は一定の距離をおいて並立する。絵画資料にみられるような形態と考えられている。今回検出した形態を大房と小子房とするには、建築史的にはさらなる検討が必要である。

ところで、興福寺の僧房については、三面僧房の1つである中室小子房の調査成果が参考になる(『興福寺食堂発掘調査報告』奈文研、1959)。そこでは、小子房の基壇外装が検出されており、礎石の痕跡は削平により確認されていないものの、掘立柱建物はみつかっていない。中室と西室は講堂を挟んで対になる僧房であり、小子房の仕様が大房と大きく異なっていたとは考えにくい。

このように、掘立柱建物SB10440を小子房とは断定できない。ただしSB10440が小子房ではないとしても、大房と柱筋を描えたきわめて密接な関係がうかがえるのであり、古代の僧房を考える上で、重要な事例になることは間違いない。SB10440については、礎石建物SB10450に先行する建物という可能性もあり、興福寺をはじめとする古代寺院の発掘調査や諸資料の調査の進展を待ちたい。

#### ii. 西室の再建と廃絶

**西室大房の再建と廃絶** 諸史料によれば、西室は8度焼失し7度再建された。上述のとおり再建にあたっては、基本的に創建時の規模を踏襲している。ただし、一部の礎石や基壇外装については位置を踏襲しつつ据え替えている。北面の基壇外側には焼土層が複数確認でき、西室と北室の間は再建にともない整地によって地表面がかさ上げされた可能性がある。また、再建に際しては、時期の特定は困難ながら、鉄鍛冶あるいは銅等の小規模な金属生産がおこなわれていた。西室大房の廃絶は、基壇外装を壊す造構の年代が18世紀前半以降に下るため、史料の記述と矛盾ではなく、享保2年(1717)の火災まで存続したと考えられる。

**掘立柱建物SB10440の廃絶** 7度再建された大房に対して、SB10440の掘立柱建物としての再建はない。ただし、柱穴埋土の最上層に土器溜がみられる箇所がいくつかあり、礎石建物として再建された可能性は否定できない。

廃絶に関しては、SB10440の柱穴を壊す土管暗渠や、土器溜や廃棄土坑の年代が参考になる。まず、土管暗渠の敷設は少なくとも2時期に区分できる。SD 10435・10436・10437 (土管暗渠A群) が古く、SD10430・10431・10432 (土管暗渠B群) が新しい。A群は、SB 10440 と重複するが、柱穴との重複関係はない。B群は柱穴との重複関係をもち、SB 10440 廃絶後に敷設したことが明らかである。次に、SB10440の柱穴を壊す土器溜SU 10442・10443 の年代は13世紀ごろに、廃棄土坑



第40図 春日社寺曼荼羅図(部分、興福寺蔵)

SK10605出土土器の年代は12世紀前半頃に位置づけられる。このため、SB10440は遅くとも12世紀前半頃に廃絶していたと考えられる。したがって、平安時代以前に位置づけられる行基式の土管暗渠A群は、SB10440と併存していた可能性がある。

### iii. その他の遺構の様相

**近世遺構群の確認** 西室大房SB10450の廃絶と前後して、西室北部周辺では方形土坑や竈群、埋壺などの施設群がつくられる。方形土坑には貼床が認められるものがあり、貯蔵施設等の性格が考えられる。ただし、現在のところ文献史料や絵画資料にこれらをうかがわせるものではなく、恒常的な施設とは考えにくい。これらの遺構群からの出土土器は、おおむね18世紀以降のものであるが、方形土坑SK10630の出土土器の年代観からは、その構築が西室大房の廃絶を測る可能性がある。この場合、大房との機能的な関係が問題となるが、現状では不明である。いずれにしても、こうした近世の遺構がまとまって検出されたことはなく、享保焼失以後の興福寺境内の実態を知る上で貴重な成果である。

## (2) 北円堂院の調査成果

**北円堂周辺の造成過程が判明** 北面回廊の基壇の造成は、Ⅲ区の東半では地山削り出しておこなわれるのに対して、西半では比較的厚い暗褐色粘質土による造成土を数層積んだ後、黄褐色粘質土と砂質土の互層からなる基壇土を版築によって造成している。この造成土・基壇土とともに遺物を含まないことから、少なくとも回廊建立時、すなわち北円堂創建時に測る可能性が大きい。造成土がのる基盤層は、北円堂基壇のやや東で落ち込み、ちょうど現在の北円堂が建つあたりを境に、その西側（および北側）の原地形は崖のような様相を呈していたと推察される。北円堂院、特にその西面・北面回廊が、大規模な造成によって平坦面を形成した上に建造されたことになる。これは藤原不比等を供養するための北円堂の創建とその立地を考える上で、重要な事実である。なお、北面回廊の規模については、Ⅲ区では後世の遺構群やカシの大樹等で壊されており、不明といわざるをえない。一部残存していた礎石の抜取穴等のわずかな痕跡は、従来の想定案を支持している。

**北円堂南面に燈籠基礎据付穴を確認** 北円堂の南面で、燈籠基礎据付穴とみられる玉石を充填した小土坑を3基検出した。これらは既存の史料等では知られていない。中央のSP10671は北円堂のおよそ中軸線上に位置し、南面階段の南端から約32m、現在の北円堂基壇から約46mを測る。このそれぞれ東西1.4mの位置に2基（SP10672・10673）を配する。2基の幅は現状の北円堂南面階段の幅におよそ合う。3基は東西に一直線に並ぶが、SP10671がやや大きい。SP10671からは奈良時代の平瓶が出土しており、古代に属すると考えられるが、東西の2基からは遺物が出土しておらず年代は不明である。古代寺院の燈籠は、建物の中軸線上に1基配されるのが基本であり（蓮沼麻衣子「西隆寺伽藍」「西隆寺跡発掘調査報告書」、奈良市教育委員会、1999）、中軸線を挟んで燈籠を2基設けるようになるのは桃山時代以後とされる（川勝政太郎「燈籠の鑑賞」「燈籠」集英社、1973）。したがって、今回据付穴を確認した3基の燈籠についても、まず中央の1基が設置され、その後後に、基壇南面からの位置を踏襲して新たに2基を建てたと推測される。

**北面回廊基壇北側の土坑群の確認** 北面回廊の基壇北辺は、近世以降の土坑群によって大きく削平されている。これらの土坑群からは、陶磁器や瓦のほか、食料残滓と考えられる動物遺存体が出土した。陶磁器の廃棄は19世紀第3四半期に位置づけられ、基壇削平の機会が明治期の廃仏毀釈に関わると考えられる。食料残滓等もこの混亂の中で生じた産物である可能性が高い。

（芝・箱崎和久）

報告書抄録

ふりがな	こうふくじ だいいつきけいだいせいびじょうにともなうはくつちょうさがいほうなな						
書名	興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅶ						
刷書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	芝康次郎・山本祥隆・番光・尾野善裕・石田由紀子・山崎健・箱崎和久						
編集機関	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所						
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市佐紀町247-1	Tel 0742-30-6753					
発行者	興福寺						
所在地	〒630-8213 奈良県奈良市登大路町48番地	Tel 0742-22-7755					
発行年月	西暦 2016年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
興福寺	奈良県奈良市 登大路町	29201	—	34度 40分 48秒	135度 51分 46秒  2013.6.3 2013.10.11 2014.9.29 2015.1.16	1,436	境内整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
興福寺	寺院	奈良時代 明治時代	西室基壇 礎石建物 掘立柱建物 北円堂院北面回廊 北円堂院燈籠基礎	土器 瓦 金属製品 銭貨 石製品 冶金関連遺物 動物遺存体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西室大房の建物規模、基壇南北規模が判明した。</li> <li>・大房に隣接して小子房の可能性がある掘立柱建物を検出した。</li> <li>・北円堂周辺の造営過程を明らかにした。</li> <li>・北円堂南面に燈籠の基礎据付穴を検出した。</li> </ul>		



---

2016年3月30日 印刷

2016年3月31日 発行

興福寺

第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報

編集 奈良市立文化財修復・保存研究会 奈良文化財研究所

発行 興福寺

〒630-8213 奈良市登大路町48番地

印刷 能登印刷株式会社

---